論　文

別府における国際観光に関する考察

鈴　木　　晶

Consideration about International Tourism in Beppu

Shou SUZUKI

【要　　旨】

別府は古くから日本を代表する温泉地として賑わい「国際観光温泉文化都市」に指定されて、また平成23年４月には、観光庁から「訪日外国人旅行者の受け入れ体制整備に係る外客受入地方拠点」に選定された。外国人旅行者の増加が見込まれる地域として一層期待されているためだが、別府市を訪れる外国人観光客のうち、８割超がアジア地域からの観光客となっているのが現状である。特にアジアからの観光客のうち、中国人観光客数が対前年比で増加して推移しているもの、その増加幅は縮小傾向にあり外国人観光客数全体の押し上げ効果を薄めており、今後の増加策が課題となっている。

【キーワード】

温泉観光地　　国際観光　　別府温泉　　観光誘致

はじめに

別府市は、大分県東部のほぼ中央に位置する人口約12万を超す県内第２位の都市で、日本の九州の北東部、瀬戸内海に面した大分県東部のほぼ中央に位置し、阿蘇くじゅう国立公園に属する由布・鶴見岳を中心とした連山の裾野が別府湾へと広がる扇状地特有の地形を形成。別府湾に囲まれた美しい景観と、温泉から湧きあがる「湯けむり」が別府市を象徴し、全国的に「国際観光温泉文化都市」としての名を知らしめている。

泉都としての顔を持つ別府市には、「別府八湯」と呼ばれるほど市内各所に温泉が湧出している。源泉数は2,307カ所以上もあり、日本の総源泉数の10分の１を占め、湧出する湯量も日量13万7,000キロリットルで国内一を誇る。この温泉郷が別府市にとって最大の観光資源であり、別府観光の父である油屋熊八は「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」という言葉を残したほどである。しかし、実際には温泉だけでなく、実は別府市には海もあり、山もあり貴重な観光資源となっている。

別府市の人口は12万人を超し、県内では大分市に次いで２番目に多い。市内には10年前に開学した立命館アジア太平洋大学（APU）や別府大学があり、現在では約4,000人の留学生が学び、県民人口に占める留学生の割合は国内一で、一般市民30人に対して１人の留学生が暮らす日本でも有数の異文化あふれる国際交流都市でもある。

一方で、国内でも有数の温泉観光都市であることから、年間を通して数多くの国内観光客が訪れているが、海外からの観光客も近年増加基調にあり、2008年度（平成20年）の別府市観光動態調査によると、同年度に別府市を訪れた外国人は市人口の２倍以上にもなっている。こうした理由から2011年（平成23年）４月には、観光庁から「訪日外国人旅行者の受け入れ体制整備に係る外客受入地方拠点」に選定され、外国人旅行者の増加が一層見込まれる地域としても期待されている。

その別府観光において現在は、過去に人気のあった観光地としての賑わいは薄れ、近年では国内経済の低迷や観光客の観光スタイルの変化によって客足が落ちているのが現状である、そのため、別府の観光産業は、国内の観光客だけで過去の繁栄ぶりを取り戻すことは難しく、国内客だけに頼るという時代ではなくなっているのが実情である。少しでも、過去の状態に戻すためには、国内客だけに頼るのではなく、いかにして外国人観光客、それも近辺のアジア諸国からの観光客をどう誘致していくのかが課題であり、その誘致に官民が一体となって、いま取り組み始めている。

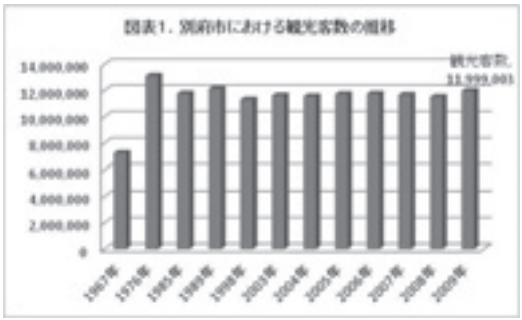
先行研究に関しては、別府における国際観光についての研究がまだ少なく、別府における国際観光に関する資料も限られていた。しかし近年、山村順次城西国際大学観光学部客員教授が別府温泉郷を事例とした観光地理学研究を発表、主に別府温泉郷の形成過程をまとめるとともに、その実態分析とあり方にも言及した。また、浦達雄大阪観光大学教授は別府温泉を中心に観光地の評価やまちづくり、旅館経営や観光客の実態について、中山氏は第２次世界大戦前の別荘地開発、小堀貴亮・山村順次氏も湯治場としての鉄輪温泉の実態を明らかにした。そのほかの分野でも別府に関する研究は多少ある。

一方、別府に来訪する外国人観光客の大半はアジアからの客であり、そのうち韓国人観光客が最も多い中で、近年では新興国の中国人観光客の誘致活動が日本全国の観光地で展開されている。その中国人観光客をテーマにした研究は、これまで東京や京都を初めとする大都市における内容を重点にしていた傾向が多い。つまり、日本の代表的な温泉観光都市である別府の国際観光についての研究は足りていないのが現状である。日本は温泉大国であり、近年中国では温泉ブームが広がり始めていることから、今後は訪日中国人観光客の観光動機や温泉志向を研究することは必要となる。本論文は日本政府が公表されたデータ及び独自の調査したデータを基に別府市における国際観光の現状及び課題を考察してみた。

１．別府における観光客の推移

別府温泉と言っても市内には鉄輪温泉、明礬温泉、観海寺温泉、浜脇温泉、亀川温泉、堀田温泉、柴石温泉、それに別府温泉があり、すべてを総称して別府八湯と呼んでいる。それぞれ泉質も異なり、距離的にも遠く離れていないため、わずかな滞在時間で八湯を巡り歩くことができるという特徴を持っていることから、年間を通して観光客の足は途切れないでいる。別府市が毎年発表している「観光動態要覧」によると、日帰りと宿泊を合わせた観光客が最も多かった年が1976年度(昭和51年)の1,312万1,962人で、この年をピークに現在まで1,100～1,200万人の水準で推移。2009年度の直近調査では日帰り客数が834万6,658人、宿泊客数は365万2,345人で総数は1,1999万9,003人だった。ちなみに、2010年度調査では、宿泊と日帰りを合わ

図表１　別府市における観光客人数の推移



出所）別府市観光動態要覧より著者作成

せた総観光客数が793万2,851人で大きく落ち込んでいるが、これは同年度から観光庁による「観光入込客統計に関する共通基準」に準じて行ったためである。従って、2010年度以降は過去との対比が出来ないため、本論文では、2009年度までのデータを採用して考察した（図表１参照）。

別府市の観光客数が1976年にピークを迎えた1,312万1,962人のうち、宿泊客数は613万1,523人、日帰り客数は699万439人で、観光客総数に占める宿泊客数は46.7％であった。これに対して、2009年度は1976年度対比で観光客数が8.6％の減少している。宿泊客数が約４割減少したためだが、日帰り客数では逆に２割ほど増加している。約30年前に比べ日帰り客が増加したのは、おそらく交通インフラが整備され、別府温泉までの移動距離が短縮されたことによるものを思われる。

1976年度に比べ2009年度の観光客総数が減少した要因を分析すると、一般観光客に対して、修学旅行客数が大きく落ち込んだことが指摘できる。修学旅行客数はピーク時の1965年度（昭和40年）には142万3,233人だったが、2009年度にはわずか２万8,608人までに減少。観光客総数がピークだった1976年度に比べても、67万6,168人から約30分の１まで縮小している。別府温泉客が減少したのは、こうした修学旅行客の落ち込みに加え宿泊客を中心とする一般客が減ったことによるものとみられる。

また、別府温泉の観光客が増加基調にあった1960年代以降、宿泊客を収容するホテルや旅館などの施設建設が増加した。特に、日本経済が最高潮に達したいわゆるバブル経済に入る直前の1986年度（昭和61年）には、こうした宿泊施設が市内に539軒が存在し、当年度の宿泊客数461万9,738人を受け入れた。しかし、バブル経済の崩壊後から平成の時代に入ってからは年を追うごとに宿泊客数が減少したことから、2009年度には宿泊施設が238軒までに落ち込んでいる。

２．別府温泉に訪れる外国人観光客の現状

別府温泉が他の温泉観光地と同じように国内観光の成長が低迷する中、外国人観光客の誘致に目を向け始めたのは、国内の各観光地に比べて比較的早い時期のことである。別府市の観光統計などによると、2003年度（平成15年）における外国人観光客数は14万3,531人で、このうちアジアからが93％と圧倒的に多く、ヨーロッパや北アメリカからの観光客がそれぞれ３％などとなっている。アジアを国・地位別でみると、韓国が最も多く11万3,843人で、次に台湾の１万2,708人、香　港3,539人・中　国1,685人だった。欧米ではアメリカから3,806人、イギリスが1,220人、ドイツは1,112人である。

直近の2009年度は16万2,122人で、このうちアジアからの観光客が全体の約82％を占める13万2,545人、ヨーロッパからは同約12％、１万9,628人、北アメリカが同約４％の6,006人となっている。また、集計方法を変更した2010年度では26万9,722人の外国人観光客のうち、アジアが同約91％の24万6,485人、ヨーロッパが同約６％の１万4,982人、北アメリカが同約２％の4,567人となっている（図表２参照）。

図表２　外国人観光客ベスト10　　（2009年度）

順位	国名	観光客数
１位	韓国	104,012
２位	中国	9,726
３位	台湾	8,843
４位	タイ	4,670
５位	アメリカ	4,586
６位	ドイツ	3,664
７位	フランス	3,278
８位	シンガポール	3,163
９位	オーストラリア	2,425
10位	イタリア	2,193

出所）別府市観光動態要覧（単位：人）

以上のように、別府市を訪れる外国人観光客はアジアからが圧倒的に多く、しかも韓国からの観光客が多いのが特徴だ。韓国人観光客が大

図表３　世界各地の国際観光客数　（単位：千人）

	2008年	2009年	2020年予測値
アジア・大洋州	180, 044	181, 069	416, 000
米州	146, 931	140, 099	282, 300
欧州	487, 616	460, 006	717, 000
中東	55, 965	53, 198	68, 500
アフリカ	44, 293	45, 559	77, 500
合計	914, 849	880, 471	1, 561, 300

出所）『JNTO 国際観光白書2010』から筆者作成

半を占めるのは、距離的に近いことが大きな要因であり、しかも近年では大型クルーズ客船を利用して福岡港に上陸し、九州各地を旅行して帰国するケースが増加。大分県には、温泉入浴に立ち寄る観光客が中心とみられる。その韓国人観光客に対して、台湾や中国（香港を含む）大陸からの中華系観光客も増加基調にあり、特に中国本土からの観光客はここ数年増加傾向が顕著となっている。

３．世界各地域の国際観光の動向

世界観光機関（UNWTO）によると、2004年から2008年までの過去５年間、世界各地を訪れた国際観光客到着数は増加し続け、2008年も前年比2.0％増のプラス成長となり、2009年の国際観光客到着数は世界的な景気低迷が影響し、2008年よりも3,838万人少ない８億8,047万人（前年比4.2％減）に落ち込み、2003年以来６年ぶりの減少を記録した。

近年、各地域の観光客到着数で顕著なのがアジア・大洋州で、成長市場として世界の注目を集めていることがうかがわれる。2009年の世界全体の国際観光客到着数は、2003年と比べて26.9％増となったが、アジア・大洋州では60.3％増を記録し、世界全体の成長を牽引した。米国同時多発テロが発生した翌年(2002年)以降、地域別では米州を抜き、ヨーロッパに次ぐ２位に躍進した。世界全体に占めるアジア・大洋州の割合も、2002年の18.8％から2009年には20.6％に増えた。[1]（図表３参照）

国際観光到着者数は世界の経済状況、観光地域で発生した病気の感染、さらに戦争により治安など様々な面の事情に左右されるものである。観光産業はほかの産業と比べると、外部から影響を受けやすい産業である。

４．日本における国際観光

観光立国とは、そのままの魅力ある国づくりであり、21世紀日本の最重要課題である。2008年10月１日に国土交通省の外局として観光庁を発足させ、日本は観光立国に向けた取り組みを積極的に推進している。観光庁では「訪日外国人旅行者を１千万人に」という目標を揚げているが世界との差はまだ大きい。ちなみに、世界各国・地域への外国人訪問者数(2010年暫定値、世界観光機関（UNWTO）まとめ）をみると、外国人訪問者数が世界で最も多かった国はフランスで、その数は約7,420万人であった。

近年、中国への外国人訪問者数の増加が著しい。2004年にはイタリアを抜いて４位に浮上し近い将来、世界１位になることが見込まれている。2006年の日本への外国人訪問者数は、世界で30位（約733万人）であった。アジア諸国・地域の中では中国、マレーシア、香港、タイ、マカオ、シンガポールより下回っている。

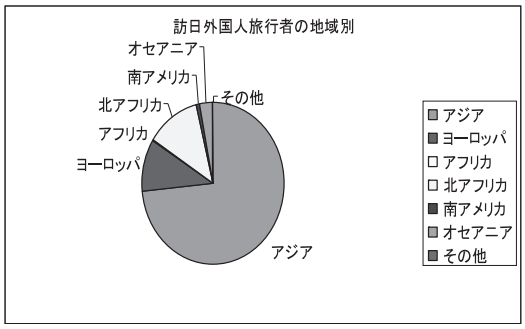
この局面を打開し、「2010年までに訪日外客数1,000万人」を実現するために、国土交通省は2003年度から、国や地方自治体、JNTO 及び民間が共同して取り組む戦略的訪日旅行促進キャンペーン VJC（ビジット・ジャパン・キャンペーン）を開始した。VJC では訪日旅行促進の重点市場を設定し、市場ごとの特性に応じた様々な事業を組み合わせ、訪日旅行促進キャンペーンを実施している。[2]

キャンーンペン当初の重点市場は韓国、台湾、米国、中国、香港の５市場であったが、2004年度に英国、ドイツ、フランス、そして2005年度には豪州、カナダ、シンガポール、タイが加わり、合計12市場となった。2010年４月からはインド、ロシア、マレーシアが加わり、合計15市場となっている。

15の重点市場の中にアジア地域が多く含まれ

ているのは、外国人観光客のうち同地域からの訪日観光客が大勢を占めているからである。日本政府の統計データによると、2009年の訪日客数を国籍別に見るとアジア地域が最も多く、全体の３分の２を占めている。しかも同じアジア地域でも中華系観光客の多さが目を引き、2008年においては日本に訪問した外国人客総数835万人のうち、アジア地域から訪日観光客人数から見ると、韓国人観光客が最も多いが、訪日客数全４位の国のうち、中国・台湾・香港の中国語系の人数が韓国より遙かに多い。中国人（台湾、香港を含む）観光客が285万人を占め、訪日外国人客の３分の１となっている。さらに、2010年の中国人観光客数は140万人を記録、訪日外客数全体を占める中国人観光客の割合は2007年の11.3％から14.8％に増えた。そのため、中国人観光客の誘致活動の成果は、今後の

図表４　訪日外国人旅行者の地域別（2010年）



出所）『JNTO 国際観光白書2010』より著者作成

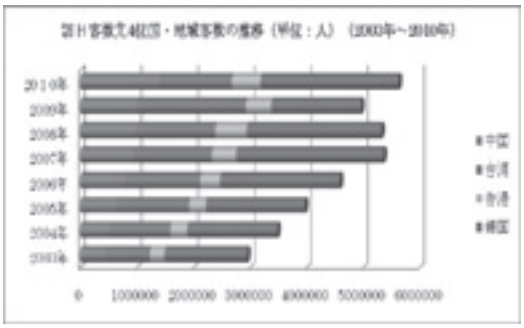
日本におけるインバウンド観光の目標が達成できるかどうか、大きく影響を与えていると考えられる（図表３・図表４参照）。

５．中国人の海外旅行について

中国では1983年に香港、マカオへの親族訪問旅行が許可されて以来、国民の外国旅行に対する意欲が増し、1988年にはタイ、1990年にシンガポール、マレーシア、1992年にはフィリピンへの旅行が解禁された。当時は親族訪問を目的とする旅行のみ許可されていたが、1997年７月には法整備が図られ、これらの地域以外でも順次、一般団体観光が正式に解禁されている。その後の主な解禁先としては1998年に韓国、1999年にはオーストラリア、ニュージランド、日本（2000年９月には初の団体観光査証を発給）を解禁し、2007年１月１日現在で合計86カ国・地域が開放されている。

その中国人旅行者の旅行地は以前からアジア・大洋州地域が中心で香港、マカオが圧倒的に多く、続いてシンガポール、タイ、ベトナム、韓国、日本、マレーシア、オーストラリアの順となっている。タイ、マレーシアなどの東南アジア諸国への旅行者数が伸び悩む中、日本、韓国、オーストラリアといった比較的最近になって観光旅行が開放された国への旅行者数が堅調に伸びている。中国人観光客が日本を訪問する場合、旅行目的に応じた訪日ビザの取得が必要となり、団体観光の目的で訪日する場合、短期滞在ビザを取得する必要がある。短期滞在ビザの取得対象には、商用や親族訪問を目的とする人々も含まれる。このうち、訪日中国人団体観光客に限って月別で見ると、団体観光客が多い月は中国の連休と重なっている。一年を通して最も訪日客が集中する月は旧正月（２

図表５　主要国別訪日外国人旅行者数



出所）『JNTO 国際観光白書2003～2010』より著者作成

月前後）と国慶節の10月である。また、訪日中国人旅行客者を性別でみると、男性と女性の比率は近年では女性の旅行者数の増加が目立っている。中国観光客の国内旅行先をみると、大都市圏である東京や大阪が中心だが、団体ツアーでは関西空港から大阪―京都―愛知―富士山―箱根-東京というコースが一般的で、その逆の

コースを含めてゴールデンルートとして人気がある。東京は最後に訪れる日程ツアーが最も人気があるようで、最後に買い物を楽しんで帰国するパターンが好まれているようだ。

6．訪日中国人が日本に求めるもの

日本が観光立国を実現するために、何よりも増加基調にある中国人観光客の需要と嗜好の研究が重要な課題だと考えられる。そのためには、中国人観光客の訪日前と訪日後の意識調査から、中国人が抱く日本に対するイメージ及び日本への旅行動向を知る必要がある。

訪日中国人旅行者数が年々増えつつある中で、前述した通り東京や大阪などの大都市圏や、京都や奈良などの名所旧跡がある都市に集中しているが、今後は地方の観光資源の宣伝が求められるのではないだろうか。また、若い中国人女性客数が増えてきたものの、一方でお年寄り客に向けた誘致活動がまだ不十分である。例えば、日本の温泉が数多くありながら、中国人旅行客に対する誘致活動が少ないことが指摘できる。温泉は単純な入浴行為だけではなく、中国人の好みに合う施設及び料理などを工夫すれば効果が出ると考えられる。

7．観光温泉都市の別府市における改善についての考察

別府市は、日本の代表的な観光地であり、日本の温泉観光都市でもある。別府における外国人観光客の誘致活動の経験は、これから日本の各観光地にとって一つの参考資料となるだろう。そこで、観光地として発展してきた別府市の歴史を振り返りながら、今後の国際観光について改善点について分野ごとに考察してみた。

⑴　交通面

別府市における観光都市としての活動は、すでに明治時代初期から始められていた。その背景には交通手段の先行整備が大きく寄与し、温泉客誘致に貢献してきた歴史がある。文明開化の明治初期、東京・新橋―横浜間で初の蒸気機関車が運行されたのを機に、都市間交通網が整備され、別府では1900年に大分駅―亀川駅間の路面電車（別大線）が運行を始めた。国内でこの都市間交通が開通したのは1895年の京都電気鉄道が始まりで、その後1898年に名古屋電気鉄道、1899年に川崎大師鉄道、1900年の熱海鉄道と続き、別大線の開通は５番目に早かった。一方、外国の客船が別府に寄港する機会も早く、寄港が大正時代になると増え始め、1926年（大正15年）のフランコニヤ号の寄港を皮切りに、各国の世界周遊船が延べ15回、1937年（昭和12年）７月の蘆溝橋事件による日中戦争勃発までの13年間にわたって各国の客船が寄港している。[3)]

このように、別府は国際観光都市として発展してきた背景には、交通インフラが早くから整備されてきたことが指摘でき、交通の利便性が最も重要な要素であることが意識されていた。しかし現在、九州地域でも新幹線が開通したものの福岡から鹿児島までのルートであるため、別府市にとっては国内観光客の誘致に不利な一因となっているが、アジアを中心とした外国人観光客については、それほど影響は大きくないものと思われる。現在、別府に来る外国人観光客は空路と海路を利用しており、空路は大分空港への直行便のほか、福岡空港を利用して別府を含めた九州各地を観光するルートが確立している。

⑵　歓楽地

別府は、昔から温泉保養地という印象のほかに、歓楽的性格も強いことが指摘できる。その始まりは、1925年（大正14年）に開設された総合遊園地鶴見園であり、同施設は宝塚を模倣して建設された。園内に各種浴場と温泉プール、大食堂、宴会場がある。さらに園内には定員600名の劇場も設けている。年中無休で経営されていた。

また、明治末期の別府花街は20軒ほどの茶屋料理、30軒の置屋、浜脇花街には10軒程度の料亭と置屋があり、別府検番には90人、浜脇検番

には30人ほどの芸者、舞妓が在籍されていたとされる。遊廓は別府に10件、浜脇に３～40軒が存在し、格子づくりの張店に200人ほどの遊女がいたといわれる。[4)]

しかし、現在の別府には夜の歓楽施設としては、鉄輪温泉のヤングセンターしかない。この施設では温泉入浴と宿泊ができ時代劇を観賞できるが、昔の鶴見園と比べると比較にはならない小規模で、さらに老朽化も目立つ。外国人観光客を誘致するには、夜の娯楽施設も大切な要素であり、別府らしい娯楽施設の建設が必要ではないかと考えられる。

⑶　ホテルの整備

大正末期から第二次世界大戦まで、別府は温泉地として世界の人々が目を向け、また別府も世界に目を向けていたと言える。明治末期には年間の浴客数が50万人を突破としていた時期もあり、大正期に入ってすぐの1911年５月には外国人客のために、当時としては珍しい近代洋風建築の別府ホテルが建設されている。[5)]

その後、別府市内には数多くのホテルが建設されたが、今現在はホテルの老朽化が進んでいるのが現状である。日本を訪れる外国人観光客だけでなく、国内からの旅行者を受け入れるには不利な要件となるだけに、既存ホテルのリニューアル等が求められる。

⑷　国際観光誘致

大正前期には、第一次世界大戦の影響で外国人観光客が一時現象するが、国と県から「外国人を優遇せよ、日本に落とす金は一日一人千円！特に別府温泉」との檄が飛び、町を挙げての国際観光誘致合戦が繰り広げられた。これらの来訪者の中には1931年４月のアメリカオックスフォード映画社トーキー撮影隊による別府温泉の名称風物行事撮影や、1931年10月の別府球場竣工に伴うベイブルース、1935年４月のチャーリー・チャップリン、バーナード・ショー、1936年５月のヘレン・ケラーなどが含まれる。

特に、外国周遊船の乗客たちは日本に立ち寄る際にはまず別府港に上陸、市内の麻生邸等でもてなしを受けたといわれる。これらの外国からの来訪者を含む観光客の増加を受けて、1928年４月には中外産業大博覧会が別府公園一帯で開催され、さらに９年後の1937年にも別府国際温泉観光博覧会が開催されている。[6)]

このように別府は昔から国際観光誘致活動を積極的に展開した歴史がある都市である。日本一の温泉地の地位も確保され、日本国内及び海外の著名人が別府での滞在療養により、別府が人気な温泉観光地となった。

⑸　中国人観光客の誘致

これまで、別府市では交通手段が整備された隣国の韓国を中心に観光誘致策を展開してきたが、2011年からは新興観光国の中国にもターゲットを当てた誘致活動を積極的に進めてきた。その結果、2011年８月10日には、中国を拠点に運航している７万トン級の大型クルーズ船である「レジェンド・オブ・ザ・シーズ」の別府国際観光港への初寄港が実現している。同月末までには４回の寄港が実現し、今後大きな経済効果が期待されている。大分県国際観光船誘致促進委員会によると、同クルーズ船で別府を訪れた観光客数は４回の寄港で合計6,910人となり、直接・間接的経済波及効果は約１億6,000万円に上ったと試算している。

特に、2011年３月の東日本大震災の影響で、国内を訪れる外国人客数が大幅に減少したことで、１年が過ぎた現在で中国人観光客を含めて観光客は戻りつつある。中国は近年、高度経済成長によって、中国人の海外旅行者数は増加し、すでに7,000万人台に上っている。世界各国の観光地が中国人観光客の誘致活動を活発化させているのは、この客数の多さ所以である。

国は2011年７月から、個人観光で沖縄を訪問する中国人向けに、一定の要件を満たす場合に３年間有効の数次ビザ（１回の滞在期間は90日以内）を発給し始めた。この中国人観光客の誘致対策が大きな反響を及ぼし沖縄県によると、2011年７月から2012年５月までの間に、数次ビザの発行数が１万9,000件に上り、沖縄を訪れ

る中国人客数は５万人に達し、2010年の２倍近くに増えた。沖縄の観光関係者によると、数次ビザの発行政策が沖縄県の知名度を上げ、沖縄に来る団体ツアー数が増えていることは確かだと話す。今回の数次ビザ発給による沖縄県への中国人観光客の誘致対策は、単に沖縄だけでなく距離的に近い九州地域への観光にも影響を与えるものとみられ、大分県とくに別府市にとっても外国人観光客の増加に期待が持てるものと思われる。

これまでに日本政府はインバウンドを促進するために公共、観光、交通施設に中国語、韓国語などの標識を増やしたり、訪日外国人客の誘致に活躍している外国人を「観光大使」に任命したりする対策を展開してきた。しかし外国人客の需要及び変化についての研究、特に訪日中国人の志向についての研究が少ないのが現状である。

８．まとめ

各種の調査データを分析すると、この10年間での訪日中国人の訪日動機が大きく変化していることが読み取れる。特に、現在の中国人富裕層の訪日意識などが10年前と相当違っていることが指摘できる。例えば「日本の温泉体験」ではすでに1997年の訪日動機の９位から、2007年には３位に躍進していることが分かった。

2009年、筆者は中国河南省で日本への観光に関するアンケート調査を実施した。調査人数は210人であり、職業や年齢層別及び収入状況について調べている。

収入状況の調査の結果によると、①80％の中国人が日本に行きたい②日本へ行ったことがある人は少ない③日本の伝統祭りを体験したい人が多い④日本の天然温泉が好きである⑤日本滞在中に日本料理と中華料理の両方を提供してほしいなどあった。

日本の泉都を代表する別府市を訪れる中国人客数がまだ１万人未満であることを考えると、健康志向を重視する中国人富裕層の誘致にはまだ拡大要素があり、温泉入浴がいかに健康的であるかをアピールする必要がある。そのためにも、別府市当局だけでなく、観光産業さらには市民がおもてなしの心を持って中国人観光客のみならず、日本人を含めた観光誘致に取り組む必要があるのではないだろうか。

他方、観光は社会や経済動向などに大きく左右される側面を持っている。例えば、世界的な感染症の流行、あるいは自国経済活動の低迷、さらには現在のような世界的な財政・金融不安といった事態が発生した時には、観光客が大きく減少する。とりわけ、韓国人や中国人観光客を相手にした国内の観光誘致には歴史観を含めた政治的リスクが存在する。2012年８月以降、領土問題から発生した大規模な反日活動は、国内における観光客誘致に暗い影を落とし、両国からの観光客が再び大きく減少している。

こうした事態に、観光産業とりわけ受け入れ施設であるホテルや旅館といった宿泊施設は、ある意味で無防備と言っても過言ではない状態に置かれている。土産物販売や各種入館施設、あるいは運輸業といった観光関連産業とは違って、突然のキャンセルによる団体ツアー客による経済的損失は大きく、しかも旅行規約の違いから国内の宿泊施設側にとってはキャンセル料が発生せず、そのまま損失を受け入れなければならない。宿泊施設にとって、こうした損失が続くようであると経営に大きな影響を与えることになり、早急にリスク管理を確立する必要が求められる。

最後に、観光庁国際交流推進課外国人客誘致室長の勝又正秀氏は中国新聞のインタビューについて、以下のように答えている。「2020年の訪日外国人客数を2000万人とする目標は、特に訪日中国人客に期待している。将来訪日中国人が600万人台を達成するように期待している」と。中国人観光客の大幅な増加を実現させるには、これまで以上に中国人の観光に対する意識を知る必要があり、その動向を把握するための各種調査が早急に求められる。

参考文献

① 日本政府観光局編　『JNTO 国際観光白書1997～2010　世界と日本の国際観光交流の動向』
② 中国国家観光局編　『中国旅遊統計年鑑2009』
③ 中国国家観光局編　『中国旅遊統計年鑑2010』
④ 浦達雄　『別府温泉郷の観光地域形成についての研究』　（株）クリエイツ　2006年
⑤ 恒松栖　『西暦2000年　別府風土記録』（株）クリエイツ　平成12年
⑥ 鈴木晶（陳晶）　「中国人の日本温泉に対する意識調査」　日本温泉地域学会『温泉地域研究』平成21年９月　第13号
⑦ 鈴木晶（陳晶）　「中国の北京市と広東省における温泉施設の一考察」　日本温泉地域学会『温泉地域研究』平成20年３月　第10号
⑧ 鈴木晶　「中国における温泉観光開発に伴う地域社会変容」日本大学　文理学部自然学研究所『研究紀要』平成22年10月　第46号
⑨ 鈴木晶　「観光立県　がんばれ！埼玉」　ぶぎん地域経済研究所『ぶぎん　レポート』2011年12月 No. 150
⑩ 鈴木晶　「異文化で育った外国人から見た日本の温泉」（社）日本温泉協会『温泉』　2012年４月　第80巻４号
⑪ （社）日本観光振興協会　『21世紀のツーリズム創造へ　数字がかたる旅行業　2011』　2011年
⑫ 大分みらい信用金庫　『大分みらい信用金庫創立80周年記念　『ふるさとの遺産』シリーズ②　別府―近代の宝庫』　平成14年

註

1）『JNTO 国際観光白書2010』白書
2）『JNTO 国際観光白書2010』白書
3）大分みらい信用金庫創立80周年記念　『ふるさとの遺産』シリーズ②　別府―近代の宝庫
4）大分みらい信用金庫創立80周年記念　『ふるさとの遺産』シリーズ②　別府―近代の宝庫
5）同４）
6）同４）